

家族介護者と被介護者の関係性に関する質的研究

—良好な関係を保つ百寿者家族を対象に—

飯尾 紗代

近年高齢化に伴って要介護者が増加し、介護の研究が盛んになってきた。介護研究は初期の頃はネガティブな側面に焦点が当てられていたが、最近は介護肯定感などポジティブな側面に注目が集まっている。ところで介護の担い手は主に家族であり、家族と良い関係を築いていることは介護者・被介護者双方にとって望ましいことである。望ましい介護の形についてサクセスフルケアという概念が近年提唱されている。Nishikawa et al (2003)は、百寿者の介護はサクセスフルケアのモデルになりうると報告している。つまり百寿者の介護を見ることで良い関係性がわかるかもしれない。

そこで本調査では「百寿者とその家族における良好な関係とは、どのような状態であるか」をリサーチクエスチョンとし、関西圏のA市とB市に住む百寿者とその家族 30 組を対象にインタビュー調査を行い、そのうち 11 組を分析対象とした。百寿者、主介護者である家族はともに男性 4 名、女性 7 名であった。同居は 4 組、別居は 7 組であった。インタビューでは、百寿者と家族の関係性、自分たちの関係の捉え方、百寿者とその家族における良好な関係とはどのような状態だと思うか、百寿者と家族で良好な関係を保つための秘訣は何かを質問した。グラウンデッドセオリーのオープンコーディングに従って分析を進めた結果、良好な関係について「距離感」「家族」「自然」「思い遣り」という 4 つのカテゴリーが抽出された。

「距離感」とは、親密度が高すぎず、お互いが一定の距離を保つという内容であり、「もう干渉しないからやと思うんです」(A さんの義娘)といった語りが得られた。また自立や調和を保つために距離を必要とするという語りも得られた。「家族」とは血縁・非血縁に関わらず、家族であるという意識を持っているという内容であった。「言いたいことパパッとと言えるし」(F さん)など、家族であるから言いたいことも言えるといった語りも得られた。非血縁の家族のみ過去の関係性に言及していた。「自然」とは特別に意識していない、普通の関係だという内容であった。「思い遣り」はお互いのことを尊重するという内容であった。E さんは「相手をあんまり無理ささないでね、いくことがやっぱり必要じゃないでしょうかね」と語った。百寿者とその家族は相手のことを思って何かをしたり、相手の嫌がることは避けると語った。居住形態別で各カテゴリーの発言数を見ると、「距離感」は 89.7%が同居の家庭、「思い遣り」は全て別居の家庭から得られたが、「家族」「自然」は居住形態に関わらず見られた。

この結果から、「家族」「自然」は良好な関係の基盤となっていると考えられる。長い期間を一緒に過ごすことで互いに信頼を深め家族という意識を築いていく。その結果自然な関係を築いたのであろう。さらに同居の家庭は「距離感」を、別居の家庭は「思い遣り」を大切にしていた。方法は異なるが、こうすることで百寿者と家族がお互いを尊重し、良い関係を保っているのだと考えられる。

本調査では、百寿者の介護における良い関係性がどのような状態かを明らかにし、目指すべき家族関係の詳細を明らかにした。これはサクセスフルケアの研究において新たな知見である。また目標となる良い関係性が明確になったことで、サクセスフルケアの達成に近づけたといえるだろう。このため本調査は学術的に意義があるだけでなく、社会的にも意義があるといえる。日本において、サクセスフルケアの達成は介護場面における大きな目標であり、その目標を達成するために本調査の結果は目指すべき関係性の指標となり、大いに役に立つであろう。また今後は施設より家族による介護が中心になっていく。そのような状況の中で家族介護に焦点をあてた本調査の結果は活用できるだろう。(臨床死生学・老年行動学)